

創建

そうこん

2008・1・11 VOL.42 NO.2 (通巻123号)

巻頭言／狩野勝重・1

卒業生の活躍紹介・2～3

大学院特別講義報告・4

在学生の活躍紹介・5

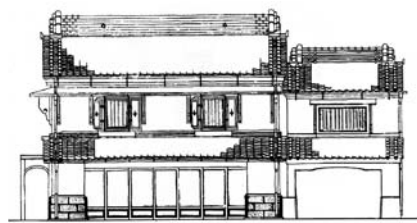
学術論文・学会発表・6

学術研究報告会・7

教室ニュース・8

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

昭和45年頃だったでしょうか。私が川越の土蔵造りの町並み保存運動に拘わり始めたのは、一番街にある「万文」という煙草卸問屋の保存運動であったと記憶していますが、まだ「まちなみ」と「景観」という言葉は、然程強い響きを持って受け止められてはいなかったような気が致します。



「万文」建物は、奥行き深い敷地の奥の倉庫から荷物を表の通りまで引き出すためにトロッコのレールが敷かれ（トロッコのレールが敷かれていた土蔵造りの商家はもう一軒お茶亀がありました）、蔵の配置もコートハウスのイメージと地窯で焼かれた煉瓦積み塀があり、当時の若き？建築の学徒であった私には大変に魅力的に映ったものでした。しかし、一方では、当時の一番街の黒い土蔵造りの町並みを眺めながら、「これ以上町並みが暗くなったらどうしようか」などとも思っていたのも事実です。この当時、倉敷においてはアイビー・スクエアーが計画されていた時期でもあり、伝統的な空間を残している其処此処の町で美観条例が制定されるようになっていました。歴史的町並みが話題になり始めたころのことです。因みに、「万文」建物は、市に買い上げて戴けるように様々な働き掛けを致しましたが、最後の裏技？で、指定したい物件があるにも係らず、売買には上屋の解体が前提になる筈であるから」と屁理屈を並べ立て、結果として建築物そのものをマイナス不動産に見立てた見積りを提出して、運営は地元で責任を持つという条件で、市が購入することとなりました。

この件が引き金になって、景観論争も盛り上がりを見せ、青年会議所をはじめとした地元の人達の熱意もあって、昭和49年に川越の一番街は「伝統的建造物群保存地区対策調査」対象地区として指名され、2年間の調査期間を経て、同51

年3月にその報告書が完成いたしました。私が郡山に赴任（同年5月）する直前のことでした。

また、昭和41年に始まった東京丸の内のお堀端における故前川國男氏設計の東京海上火災ビルの建設をめぐって、それまで頑なに守られてきた高さ31mの取り決めに縛られられた美観論争は強いインパクトを社会に与えたのも未だに記憶に残っています。この美観論争は同49年に東京都と東京海上の間で双方妥協して現在の建物となりました。その結果、陸続と超高層ビルが建設されることになり、東京のスカイラインは大きく変わるようになったと感じています。現在の丸の内は、さらに大きな都市景観の変化を齎すものと受け止めてよいでしょう。原宿ヒルズがスカイラインにこだわったのとは対照的な取り扱いです。

こうした流れの中で、景観は美観と共に同義語のように用いられていたような気がしますが、伝統的建造物群の取り扱いにあっても特別に区別はされてこな

「まちなみの風景」と「まちなみ景観」

教授 狩野勝重

かったようで、美観条例と景観条例が混用されてきたのではないのでしょうか。

都市景観という言葉が明確に謳われたのは、1986（昭和61）年に東京都の「都市景観懇談会」（座長 芦原義信）が、「良好な都市景観の形成を目指して一都市景観は地域の共有財産、景観への配慮は都市生活のマナー」という意見書を上奏し、地域住民が主体的に取り組むべき内容で、行政は先導的役割を押し付けではなく、下支えで行うという姿勢を明らかにしたところからではないかと受け止めています。

ところで、現在、「福島県景観形成基本法」にあつては「磐梯山、猪苗代湖など、我が国を代表するスケールの大きい自然景観をはじめ、幾多の歴史的・文化的遺産を有し、豊かで優れた景観に恵まれています」とし、その中身は「優れた自然景観、歴史的・文化的景観」と規定しているようですが、相変わらず「景観とは何か」が不明確なまのようです。国土交通省の「景観緑三法」においても不明確だったのでしょう。「良い景観」を指定する前に「悪い景観100選」を募り、悪いと感ずるモノを排除することか

ら始められています。方法論としては適切であると考えていますが、そもそも「悪い」とはどういうことなのでしょう。少なくとも、皆が嫌だという部分をなくしていけば、残るのは悪くない部分ということになり、全体的に良い方向に向かうと考えてよいのでしょうか、いま一つ納得がいきません。

そこで、少し視点を変えて「景色」、「風景」、「景観」という用語が何を意味しているかということを考えて見ましょう。

「色」・「風」・「景」・「観」はそれぞれに大変に似通った言葉で、一文字一文字の意味合いには微妙な相違があるようです。これらを組み合わせた場合、どのような内容が強調されてくるのでしょうか。想像をたくましくしてみましょう。

まず、「景色」ですが「光、姿、自然のおもむき」という内容と「人の顔色が微妙に変化する」様子を組み合わせると、自然の有様を描写するのに適した言葉だと思えます。

「風景」は「大気の動き、習わし、体裁」という全体の場面の展開を「光、姿、自然のおもむき」の中から切り取ったもので、自然のようすを風と光と影で捉えたものといえましょう。すなわち、自然と人間界のことが入り混じっている現実のさまを言います。嘗て、読売アンデパンダン展という新進画家集団を支えていた展覧会が開催されていましたが、その頃聞いた言葉に「風景画であっても写実的であることを必ずしもよしとはしない。すなわち、描く者が其処に何を感じているかをキャンパスに切り採る必要がある」という内容があったことを思い出します。

このようにみたとき、私の中では「景観」という言葉が、「光、姿、風情、一纏りの場面」と「観」の「注意して良くみる、調べてみる、意識」との組み合わせで、本質は、その視点でも対象物でもなく、その両者の「関係性」にあるものと受け止められます。

すなわち、「景観」という言葉は、現実には私達が身を置いている日常世界に視点を定め、それが快適で良好な生活空間であり、安全・安心・調和の取れた空間、文化的空間を前提として「対象物と大きく乖離することのない関係性を築く」ことであると規定することができないのでしょうか。巨大ネオン、真っ赤な看板、道路脇に林立する看板などは、まさに周辺の空間と乖離した世界であると言えるのではないのでしょうか。「美しい国土づくり」も、「景観条例」も、永い年月をかけて創り上げてきたこの国の生活環境を十分に理解した上で、住民の世界観を反映させたものでなければなりません。

卒業生の活躍紹介

サービス業・意匠設計職

建築家「地図に残る仕事」

森 浩



建物の設計に対する漠然とした憧れがきっかけとなって、大学の先輩の設計事務所に入れていただいたのが設計活動を始めたきっかけです。その後、5年間の過酷な修行時代にピリオドを打ち、新たな挑戦を行うため組織事務所である日本設計へ移ることにしました。それに伴い、設計活動も東京に変わり、もともと九州で仕事をしたかった私にとって納得できない日々でした。しかしながら東京は、建築を学ぶ者にとって刺激的で、魅力的な都市であり、多くの情報が飛び交い、様々な建築を体験することが可能な場所でした。それまでの私の設計に対する漠然とした憧れは、私がこれから建築の仕事をする上で、重要な意味を持つものへと変化していることを確信している時代です。

その時期に、長崎のハウステンボス計画のチームの一員としてオランダへの調査に行ったことが、ヨーロッパの都市と建築を直接身体で体験する機会となり、その後の私の建築に対する考え方に大きな影響を与える結果となります。

その後、31歳の時にかねてからの念願がかない、設計活動は九州支社へと移ります。それから19年がたち現在50歳です。この間、九州各県には私が設計したコンベンションセンター、大学、高校、研究所、生涯学習センター、女性センター、事務所、劇場、図書館等の様々な用途の建物が立ち上がり、多くの方々に利用されています。まさに各都市の「地図に残る仕事」です。

また、近年は設計活動と共に、九州大学及び九州産業大学で非常勤講師として教育活動も行うようになりました。2004年には「中国長春市南部中心地区都市計画国際指名設計競技」で最優秀賞を頂きました。2005年には「早稲田大学大学院情報生産システム研究科」という大学院大学の設計で、日本建築学会作品選奨という賞を頂き、東京で表彰式に出席するという機会を得ました。現在、日本設計九州支社副支社長兼チーフアーキテクトとして管理職、建築家、非常勤講師という3つの顔を使い分けて頑張っています。(もりひろし)

略歴

1980年 建築学科卒業（足立研究室）

1986年 日本設計入社

2007年12月現在、

日本設計九州支社副支社長
兼チーフアーキテクト



宇美町図書館

サービス業・構造設計職

建物の診断

大岡美紗恵

建築学科のみなさんは、構造の分野にどのようなイメージを持っているでしょうか。構造設計をし、それを図面化することでしょうか。もちろんそれも仕事の一つです。

近年の建築は、新築だけでなく、今ある建物を有効利用するという考えがあります。耐震診断を行い、補強を行うことで、建物を長持ちさせようというのです。

耐震診断は、全国的に行われています。実際に建物の調査を行い、その調査結果と、設計図面、構造計算書などを参考にしながら、診断結果を出します。その結果を基準となる数値と照らし合わせ、建物の耐震性を判定します。

診断の結果、耐震性が低いと判断された建物に対して、補強計画を行います。具体的には、建物のバランスを見ながら、壁を増設したり、柱の補強をしたりして、建物の耐震性が向上するようにします。実際に使用できない建物では意味がありませんから、補強後の使用状況を考慮し、意匠、設備などと打合せを行いながら、計画を進めていきます。基準となる数値は、地域や建物の建っている場所、使用状況等により割増係数がかかる場合もあります。大地震時、避難地や連絡の拠点となる建物は、地震直後から活動する必要がありますから、より高い耐震性が求められるからです。

地震大国といわれている日本では、どこに建物を建てても、地震と無縁といえるところはおそらくないでしょう。大地震といわれる地震も各地で起きていますし、東海地震はいつ起きてもおかしくないともいわれています。耐震診断、補強計画も構造の仕事の一つです。

今ある建物をより長く使用するためにはどうしたらいいかを考えることも、新築とは違う魅力の一つだと思っています。(おおおかみさえ)

略歴

2004年 博士前期課程建築学専攻修了
(千葉研究室)

2004年～ 企業組合針谷建築事務所



建設業・施工管理職

施工管理・現場監督

白澤 栄二

物造りが好きで、建築という仕事に就いた。建物がどのように出来上がって行くのか、自分でやってみたいと思って、この仕事を選んだ。

現場監督とは、いきなり中間管理職のような立場である。仕事のイロハも解らないのに、職人に指示をしなければいけないし、図面と違った施工の時は手直しも指示しなければいけない。現場に常駐して管理するという事は、それなりの経験とモラルが要求される。

上司、先輩の姿を見て、自分も早くそうなりたと思って、必死に覚えた。建設用語を覚え、段取り、手順を覚え、自分で施工図を描いて、指示した。資格も取得するため、学生の時では考えられないほど勉強した。

にもかかわらず、現場で実際に建物を造るのは、専門工事業者の作業員が行う。自分がいなくても、現場は動き、それなりに進んでしまう。仕事における自分の存在価値が見出せず、よく悩むのはこの時期だと思う。

一つ、二つと建物を完成させ、施主、設計、専門工事業者と意見交換をしながら、建物造りができるようになり、その完成プロセスに自分流を見出せるようになって、この仕事の面白さを感じるようになるのだと思う。どのような手順で、どのような計画で造るか。十人十色である。

また、建設業の原点は人だと思う。その場所に人が来て、手を動かして作業する。だから大地に基礎を据えて形となっていく。その人に、自分の意思を伝えるのも現場監督の仕事。図面で説明したり、見本で説明したり、その方法も様々。機械のように動かないのも、人であることの証。職人も人、存在を認めることで、その力量以上に動くことも事実。そんな人との接点を持ち続けて仕事ができるのも、この仕事の魅力だと思う。

いくつ建物を完成させても、同じ立地条件の同じ建物はない。どのように造ろうか、現場監督の腕の見せどころではないだろうか。(しらさわえいじ)

略歴

1995年 博士前期課程建築学専攻終了(倉田研究室)

1995年 大成建設株式会社 入社



都内：某新築工事

建築設備業・施工管理

イメージーションの必要性

山下 裕一

ある日曜日の朝、当然まだ寝ている時間に携帯電話が鳴った。『客先から電話があつて、どうも冷ケースのトラブルらしいです！』部下からの連絡で急いで飛び起き、車で現地へ向かった。竣工間もない建物で冷却水トラブル。冷ケースが冷えず生菓子が販売出来なくなっていた。処置後あちこちに頭を下げ、何とかその場は収まったが『回避できたトラブルだな・・・』

我々の仕事は製造業である。上下水道に始まり空調設備・給排水設備・消火設備など・・・が、見本となる同じものは基本的に存在しない。二次元の設計図を基に三次元の物を作っていく。トイレ・厨房・機械室・・・それらを構成する配管・ダクト・機器・・・設計図から完成形をイメージし、そこに至るプロセスをイメージし、そのイメージを職人に伝えて理解してもらい作っていく。しかし、完成形をイメージして作成された設計図と、その設計図を見てイメージし作成した物が必ずしも同じになるとはかぎらない。当たり前だが人によってイメージに誤差は発生し、それを伝えようとすれば伝えられた側にも誤差が発生する。イメージが足らなくても、また誤差が大きくても文頭のようなトラブルが発生する。個性のある多くの人達が集まって、一つの物を作っていく。そこには多くの問題も発生するが、一人のイメージでは思いつかなかった物が出来上がる可能性もある。正直言って作っている時の辛さは大きいですが、出来上がった時はその辛さも笑い話になり、達成感もある。まして、一昔前のCMではないが、それが地図に残る建物の時は嬉しさ倍増である。

かなりの部分をマイペースで過ごせる学生時代から180度違う世界に入れば、それがどんな仕事であれ当然辛さが先に頭を占領してしまう。大事なものは、その辛さの無い世界を探すより、その辛さの中でもマイペースを見つけることではないだろうか。(やましたゆういち)

略歴

1987年 建築学科卒業(福地研究室)

1987年 芝工業㈱入社(東京本店工事部)

2000年 同社千葉支店工事部



ecute立川

大学院特別講義報告

「建築史家・藤森照信とその建築」を聴講して

M1 篠 木 正 義

今年度の大学院特別講義は、9月27日に70号館7012教室にて、院生・学部生約200人が聴講する中、藤森照信先生（東京大学生産技術研究所教授）による「建築史家・藤森照信とその建築」と題して開催され、海外の自然素材を用いた建築の他、藤森先生の作品を題材に「自然との共生」の難しさをご教授頂いた。その中から、特に興味を持った話題をピックアップし、筆者の考えを交えて意見を以下に述べる。

まず、アフリカのサハラ砂漠や南米のマリには、泥を固めてできた建築が数多く存在しているという話題である。講義のスライドの中で、つなぎ目や境目のない、泥を固めてできた宮殿が紹介された。泥で造ってあるので目地がないのは当然なのだが、建物に目地がないということが、これ程にまで違和感を覚えるとは思わなかった。地面も泥のせいか、建物と大地の間にも境目がなく、限りなく建物と大地が一体化しており、さながら大地から隆起したようにも見えた。日本では、耐震の問題などで、そのような建築を建てるのは無理であろうが、自然との共生を徹底した建物を日本で建てるにはどうすればよいのか、という難しさを改めて考えさせられた話題である。自然との共生に関する話題で、屋上緑化などを用いても植物と建築の一体化は難しいとお話されていた。しかし、そもそも住居は自然素材で出来ていた訳で、厳しい自然に立ち向かう必要性もあって、人間が自ら意識的に自然から建築を遠ざけた面もある。その逆もどり感が、一体化を難しくさせているのだろうか。一方、「自然と人間という区別はむしろ奇妙な区別であって、人間が自然の中の一部である」という考えも広く認知されている。自然の範囲の定義そのものが難しいが、自然と人間との共生という考えは、自然と人間とを対等視した上で出てくる考えであり、ある面で一時的に自然に打ち勝ったと思

い込んでいる人間の勝手な考えかも知れない。厳しい自然に立ち向かう思想の源でもあるヨーロッパでも、近年ドイツのエコヴィレッジや、スペインの国境付近に存在する石と石の間の住居など、自然と一体化するほど自然を意識した建物が多く存在している。日本では、元来自然と上手く付き合うのが当然であったが、その自然に対する無意識さと、急速な近代化が相俟って、近年、自然と一体化するほど自然を意識した建物が追求されることは少なかった。藤森先生の作品に見られるように、自然素材を活かした設計手法を積極的に取り入れることが、より多くの人に自然を良い意味で再意識させることができるのではなかろうか。

茅葺屋根でさえ見慣れない筆者にとっては、ニラハウスやタンポポハウスの発想には驚かされた。身近にある自然を全く意識しないで生活している自分が、その視野の狭さに気づかされたように、それらの建築は、そのシンプルさの中にメッセージが込められているように思えた。また、藤森先生の設計の発想手法に関する講義内容は、いわゆる常域の枠を超えているように思う。その中でも印象に残ったのが、「食堂は、なるべく一体で、できれば柱が無い方が良い？自然素材の柱が林立するのも違った赴きがあるのでは？」、「日本画を土足でみるのは如何なものか？裸足で上がる美術館も説得力あるのでは？」の2つのフレーズである。ご自身では説明責任のある者としての苦し紛れの言い訳とおっしゃっていたが、何事も先入観に囚われるのではなく、「何を持って普通なのか？」「常識が本当に良い解答か？」と常に自分に問いかけ感性を鍛えなければ、何かに訴えかける仕事はできないのではないかと、再認識させられた言葉であった。多くの学部生にとっても、普段何気なく当たり前と考えていたことに疑問を持つ契機になったことであろう。



高過庵



神長官守矢史料館

在学生の活躍紹介

第11回JIA東北建築学生賞で最優秀賞を受賞！

日本建築家協会（JIA）東北支部主催の第11回東北建築学生賞で岸周君（学部4年生・浦部研）の作品「立体路地」が最優秀賞を受賞しました。

地方の空洞化しつつある中心市街地の不整形な空き地を活かし、建物用途である「古本」図書館の書架配置にも適し、周囲にある既存の建物と調和できる単位空間（3m角の立方体を基本として高さを微調整する）で、立体的な路地や広場を構成した個性的な空間を提案したものです。受賞の喜びの声を紹介します。

東北各県の14校（9大学、1短大、1高専、3専門学校）16学科からの応募37作品の中から最優秀賞を頂いたわけですが、学外でも自分の設計が評価されたことはとても嬉しかったです。この度の結果は、ご指導頂いた先生方や研究室の先生・先輩・仲間達にも刺激されてのことですから、自分の恵まれた環境に拠るところも大きいと思います。また、自分が今までやってきたことが間違いではなかったと少し証明された感じで、これからも前向きに頑張れそうです。



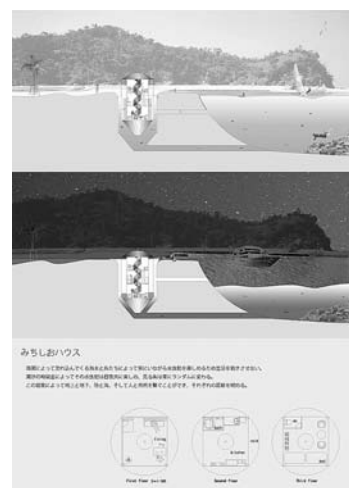
9坪ハウスコンペ2007で一般部門の優秀賞を受賞！

「9坪ハウス」コンペ2007（主催：株式会社コムデザイン）において、近藤喜尚君、松永拓磨君（学部4年生・松井研）の作品「みちしおハウス」が、一般部門での優秀賞を受賞されました。12月6日受賞式出席後の喜びの声を紹介します。

今回は初コンペということもあり、2人でチャレンジしてみました。予定を立て、昼間はお互い研究に打ち込み、夜にコンペの作業を進めました。

テーマに対してどういった形で提案するかに悪戦苦闘しました。意見の食い違いも生じましたが、その衝突も作品を良くする大きな要因となっていると思います。A3用紙1枚で表現するという条件があったため、その中で自分たちの提案をいかに第3者にわかりやすく伝えるかが非常に難しかったです。完成した時は2人ともとにかく自分たちの満足できる作品ができたことに感無量でした。大学生活の中で1番の思い出ができて感激です。

その作品を良くするにはその人次第です。自分が作っていて楽しい、自信を持って語れるということが大切です。私達は建築的に弱いコンペでしたが、もっと建築的な目線で評価をされるようなコンペにチャレンジした方が、その時に学べるものは大きいと思います。これからコンペに挑戦しようと思っている方は、そちらにたくさんチャレンジして自分を磨いて欲しいです。



作家デビューしました！

今正太朗さん（ペンネーム・学部4年生）が、新風舎文庫から「青百合」を発刊しました。作家デビューにあたり、本人からのメッセージを掲載します。

もともとクリエイティブなことが好きで、小説や詩も中学生の頃から書いていました。それが高じて、大学進学を期に、様々な出版社の文学賞に応募するようになりました。今回出版することになった「青百合」も、実は新風舎の出版賞に応募して落選した作品なのですが、企画本部の方から共同出版を勧められ、6月15日に発刊する運びとなりました。この小説の中で書きたかったことは、過去と今で揺れ動く主人公を通して、変わること、変わらないこと、どちらもあるから人生は楽しいということ。私自身、色々な経験をしながらいつまでも自分らしくありたいと思っています。



学 術 論 文

* 届け出があった記事を掲載

■国際会議発表

- ・ Sanjay Pareek 鈴木裕介, 小林朗: Flexural and shear strengthening of RC beams using newly developed CFRP and polymer-cement pastes as bonding agents, Proceedings of the 8th International Symposium on Fiber-Reinforced Polymer Reinforcement for Concrete Structures, Patras, Greece, pp.1-8, July 2007.

■学術論文

- ・ 斎藤俊克, 出村克宣, 寒河江賢伍, 「ビニロン繊維補強ポーラスコンクリートの強度性状に及ぼす水セメント比の影響」, コンクリート工学年次論文集, Vol.29, No.1, pp.459-464, July 2007. (コンクリート工学年次大会2007)
- ・ 菊地弘悦, 出村克宣, 「竹補強セメントモルタルの機械的性質」, コンクリート工学年次論文集, Vol.29, No.2, pp.793-798, July 2007. (コンクリート工学年次大会2007)
- ・ 松下信禎, 若井正一, 「官庁型オフィスにおける執務者の座席配置からみた場の優位性に関する検討」, 日本大学工学部紀要, 第49巻第1号(工学編), pp.49-54, 2007年9月

学 会 発 表

■2007年日本建築学会大会 日時:平成19年8月29日~31日 会場:福岡大学

- ・ 内部音源法の測定結果に影響を及ぼす要因に関する実験的検討 — 室内吸音力の影響に関する検討 —
○溝口紗世・濱田幸雄
- ・ 床衝撃音の評価方法に関する研究
— 標準重量衝撃源による床衝撃音と生活行為音の対応に関する実験的検討 —
○橋本慧一・濱田幸雄
- ・ 講堂・集会室等の規模・配置と利用実態 — ミュージウムにおける講堂・集会室等に関する研究(その1) —
○古沢初美・浦部智義
- ・ 劇場・ホールの駐車台数に関する研究 — 劇場・ホールの一般開放性に関する研究(その1) —
○篠木正義・浦部智義
- ・ 視点場と指摘物から見た階段の空間分析 — 建築空間における階段・スロープの研究(その3) —
○志賀文美(東京電機大)・積田洋・浦部智義・中山誠健
- ・ 視点場と指摘物から見たスロープの空間分析 — 建築空間における階段・スロープの研究(その4) —
○中山誠健(東京電機大)・積田洋・浦部智義・志賀文美
- ・ 地方都市の中心市街地に点在するBrown Field の利活用に関する研究
○武田行由・狩野勝重
- ・ 地方都市中心市街地における街並み整備に関する研究
○木村勇介・狩野勝重
- ・ 耕地整理事業がまちづくりに与えた影響に関する研究
○鈴木都秀・松井壽則
- ・ 公園遊具の色彩と児童のストレス反応について
○鈴木大・土方吉雄・三浦金作
- ・ 能舞台における演者の姿勢と動作特性に関する人間工学的考察
○小堀まどか・若井正一
- ・ 細長い平面形を有する建物の立体振動性状 — その4 実コンクリート強度を用いた微動応答解析 —
○伊藤慎也・倉田光春・千葉正裕・浅里和茂・日比野巧
- ・ 壁の解析に関する基礎的研究
○渡邊要介・倉田光春・ガン・ブンタラ・篠崎賢司
- ・ 数値積分法に関する基礎的研究
○柳川雅嘉・倉田光春・ガン・ブンタラ・野内英治
- ・ 多自由度系振動方程式に関する基礎的研究
○杉山和隆・倉田光春
- ・ 高力ボルトとせん断鋼棒を併用した簡易型接合部に関する研究
(その1) 丸鋼を用いた基礎実験
○浅里和茂・千葉正裕
- ・ 街並み構成材料の地域特性に関する調査研究
その20 主要中心業務42 地区における外壁仕上の多様化-統一化傾向評価
○田綿隆文・岩崎博
- ・ 高強度材料を用いたRC 造柱・梁接合部に関する実験
その7 接合部斜補強筋の定着長さによる検討
○鈴木裕介・Sanjay Pareek・倉田光春
- ・ 軽量ポーラスコンクリートの圧縮性状
○菊地弘悦・藤井知明・斎藤俊克・出村克宣
- ・ 軽量ポーラスコンクリートの曲げ性状及び耐衝撃性
○藤井知明・菊地弘悦・斎藤俊克・出村克宣
- ・ ビニロン繊維補強ポーラスコンクリートの乾湿繰返しに対する抵抗性
○寒河江賢伍・出村克宣・斎藤俊克
- ・ ビニロン繊維補強ポーラスコンクリートの圧縮強度と曲げ強度の関係
○斎藤俊克・出村克宣・寒河江賢伍
- ・ 石灰石砕石に再生粗骨材を置換使用したコンクリートのフレッシュ性状及び圧縮強度
○柳啓(助建材試験センター)・笠井芳夫・渡澤正典・福部聡

第50回日本大学工学部学術研究報告会

開催日：平成19年12月8日（土）

- ・ ビニロン繊維補強ポラスコンクリートの曲げ挙動 ○齋藤俊克・寒河江賢伍・出村克宣
- ・ 乾湿繰返しを受けたビニロン繊維補強ポラスコンクリートの性状 ○寒河江賢伍・齋藤俊克・出村克宣
- ・ 軽量ポラスコンクリートの圧縮及び曲げ性状 ○藤井知明・菊地弘悦・齋藤俊克・出村克宣
- ・ 竹補強セメントモルタルの曲げ性状 ○菊地弘悦・出村克宣
- ・ 再生粗骨材を碎石に置換使用したコンクリートの性質に関する一実験
ー乾燥収縮、耐凍結融解及び促進中性化ー ○柳啓（（財）建材試験センター）・渡澤正典
- ・ 街並み構成材料の地域特性に関する調査研究
ーその21 外壁仕上材料の採用傾向に及ぼす地区背景の影響ー ○田綿隆文・岩崎博
- ・ 日本大学工学部3号館の立体振動性状 ○志賀竜太・倉田光春・千葉正裕・浅里和茂・日比野巧
- ・ 日本大学工学部2号館の地震時挙動 ○日比野巧・千葉正裕・浅里和茂
- ・ 細長い平面形を有する建物の立体振動解析 ー実コンクリート強度を用いた建物・地盤連成系の検討ー
○伊藤慎也・倉田光春・千葉正裕・浅里和茂・日比野巧
- ・ 確認申請における構造計算確認と適合性判定の関係に関する検討 ○浅里和茂・野内英治・千葉正裕・日比野巧
- ・ 高強度材料を用いたRC造柱・梁接合部に関する実験的研究
その7 接合部斜補強筋及び鋼繊維補強高強度コンクリートの検討 ○鈴木裕介・Sanjay Pareek・倉田光春
- ・ 有限要素法による非圧縮性流体に関する基礎的研究 ○倉田光春・Buntara S.Gan・添野祐平
- ・ MPS法を用いた構造解析に関する基礎的研究 ○Buntara S.Gan・倉田光春・片桐俊之・高澤伸弥
- ・ 梁の形状解析に関する基礎的研究 ○片桐俊之・倉田光春・Buntara S.Gan・高澤伸弥
- ・ 梁の幾何学的非線形解析に関する基礎的研究 ○高澤伸弥・倉田光春・Buntara S.Gan・片桐俊之
- ・ 1自由度系への縮小・復元法に関する基礎的研究 ○杉山和隆・倉田光春・Buntara S.Gan
- ・ 骨組の解析法に関する一考察 ○柳川雅嘉・倉田光春・Buntara S.Gan
- ・ せん断応力・せん断変形を考慮した梁の解析法に関する基礎的研究 ○渡邊要介・倉田光春・Buntara S.Gan
- ・ 梁の非線形解析法に関する基礎的研究 ーその1ー ○末安惟一・倉田光春・野内英治・伊藤禎二
- ・ 梁の非線形解析法に関する基礎的研究 ーその2ー ○伊藤禎二・倉田光春・野内英治・末安惟一
- ・ オフィスにおける執務者の座席配置と場の優位性に関する研究
ー地方自治体の庁舎を事例とした座席配置と役職等の関係ー ○松下信禎・若井正一
- ・ 能舞台における演者の姿勢と動作特性に関する人間工学的考察
ー観世流の所作を事例としてー ○小堀まどか・若井正一
- ・ 建築現場における労働災害事例からみた安全性に関する人間工学的検討 ○岡本啓・若井正一
- ・ 個別要素法による歩行者の動線シミュレーション手法に関する基礎的研究 ○佐久間啓太・倉田光春・野内英治
- ・ ラオス国における学校・CLC建設の技術支援 その1 ○浦憲親（金沢工大）・水野一郎
- ・ 劇場・ホールの駐車台数に関する研究 ー劇場・ホールの一般開放性に関する研究（その1）ー
○篠木正義・三浦金作・浦部智義
- ・ ゴムボールを標準重量衝撃源とした評価尺度に関する基礎的検討 ○橋本慧一・濱田幸雄
- ・ 内部音源法の測定結果に影響を及ぼす室内吸音力に関する実験的検討 ○溝口紗世・濱田幸雄
- ・ 能登半島沖地震における避難住民の意識及び避難生活に関するアンケート調査 ○秋光昂・濱田幸雄
- ・ 里山保全活動の実態とその住民評価に関する研究
ー群馬県及び栃木県の里山保全団体4事例を対象としてー ○山口廣訓（宇都宮大工・院生）・三橋伸夫
- ・ 地方中核都市における街並み整備の手法に関する研究
ーK市中心市街地における建築物年代別分布の現況から見る将来予測へのプロセスー ○武田行由・狩野勝重
- ・ 地方都市中心市街地における街並み整備の手法に関する研究
ーワークショップを通したまちづくりに対する住民意向の掌握と住環境整備の課題ー ○木村勇介・狩野勝重
- ・ 地方都市中心市街地における建築物実態調査
ーS市における建築年次・用途・形態等に関する調査報告ー ○唯野睦泰・狩野勝重
- ・ 中核都市K市における土地利用環境の変化 ー農業用地から住宅地へー ○鈴木都秀・狩野勝重
- ・ 景観形成を視野に入れた建築物の評価尺度表作成の試み ○宮下英子・狩野勝重
- ・ 街路空間における探索歩行時の注視に関する研究 ー現地実験と室内実験の注視傾向の比較についてー
○千葉将隆・三浦金作・土方吉雄
- ・ 児童の遊び場に関する調査研究 ー公園内における遊具配置と休憩施設についてー
○鈴木大・三浦金作・土方吉雄

■**米田亜耶子院生**（若井研）は、6月20日、イシカワグループ主催の2007住宅設計コンペにおいて、応募総数251作品中、佳作に入選した。

■**米田亜耶子院生**（若井研）は、7月5日、富士フィルム主催のFUJIFILM第2回インクジェットフォトコンテストで「画彩賞」に入賞した。

■**三浦教授**、**土方准教授**、**市岡講師**は、7月11日、福島県より福島県景観アドバイザーを再度委嘱された。

■**浅里准教授**（委員長）と**野内講師**（副委員長）は、7月6日から9月30日の期間、(社)福島県建築士事務所協会より、建築確認検査等検証委員を委嘱された。

■**出村教授**は、7月25日、本学で開催された日本コンクリート工学協会東北支部主催のコンクリート診断士の技術研鑽のための勉強会において、「補修に伴うマクロセル腐食の発生について」と題して講演された。

■**土方准教授**は、9月1日、福島県より福島県建築審査会委員・会長代理に再任された。

■**浦部講師**と**浦部研究室**は、9月1日に福岡大学で開催された、日本建築学会劇場・ホール小委員会主催のシンポジウム『参加する劇場から愛される劇場へ』の冊子企画・編纂・デザインを行なった。

■**松井准教授**は、9月14・15日、11月16日福島県社会福祉協議会主催の平成19年度地域介護専門職員研修（福祉用具・住宅環境改善研修）会にて建築の立場からの講師を務めた。なお、**高村眞絵**、**巖岩豊**、**松本望**、**水落力也**（学部4年生・松井研）の4人はオブザーバーとして参加し、介護専門員と情報交換を行った。

■**浦部講師**は、福島県建築設計協同組合より、9月15日に行なわれた「湯川村統合幼稚園建設工事基本・実施設計業務委託コンペ」の審査委

員会委員長を委託された。

■9月22日、アエル仙台で開催された日本建築家協会（JIA）主催、第11回東北建築学生賞で、応募総数37作品中、**岸周君**（学部4年生・浦部研）の作品「立体路地」が最優秀賞を受賞された。

■**土方准教授**は、9月29日、田村市より田村市都市計画審議会委員・会長に再任された。

■**土方准教授**は、10月5日、福島県より飯坂地区都市再生整備事業飯坂温泉駅前環境整備等基本計画・実施設計者選定審査委員を委嘱され、委員長に選出された。

■**土方准教授**は、10月12日、郡山市より郡山市公共事業評価委員会委員に再任された。

教室ニュース

■**土方准教授**は、10月17日、郡山市より郡山市中心市街地活性化推進委員会委員・委員長に再任された。

■**若井教授**は、10月27日、日本経済新聞NIKKEIプラス1「暮らしサブライズ・なぜか人は左に回る」に記事掲載された。

■**根本賢院生**（若井研）は、福島テレビの番組うつくしま情報局「理科っておもしろい！」に出演した（10月28日放映）。

■**松井准教授**は、10月31日、福島県建築士審査会の代表として、本年度二級建築士、木造建築士試験「設計製図」の二次採点を宮城県建設産業会館で行った。なお、福島県内の合格者率は18.38%（12月6日発表）。

■**土方准教授**は、11月9日、福島県景観アドバイザー派遣事業により、福島県都市計画協会主催の都市景観研修会・意見交換会「良好な景観形成による魅力あるまちづくり」のコ

ーディネーターを依頼された。

■**市岡講師**は、11月9日、福島県より福島県屋外広告物審議会委員に再任された。

■**土方准教授**（委員長）、**市岡講師**は、11月14日、郡山市より「郡山市景観まちづくり賞」選考委員会の委員を委嘱された。

■**浅里准教授**は、11月16日、コラッセふくしまで開催された、福島県耐震化・リフォーム等推進協議会主催の耐震改修・リフォームセミナーで「最新の地震対策について」と題して講演された。

■**若井教授**は、日本私立大学連盟誌「大学時報」11月号に「わが街一大学のある風景、水と緑に育まれた経済県都」を寄稿された。

■**出村教授**は、11月20日、本学で開催された福島県生コンクリート工業組合技術講演会において、「コンクリート構造物の補修方法」と題して講演された。

■**土方准教授**は、11月21日、喜多方市より、喜多方市都市計画審議会の会長に選出された。

■「9坪ハウス」コンペ2007（共催：株式会社文藝春秋 TITLE編集部）において、**近藤喜尚君**、**松永拓磨君**（学部4年生・松井研）の作品「みちしおハウス」が、応募総数はプロ部門・一般部門併せて675作品中、一般部門での優秀賞を受賞された。（TITLE誌（11月26日発売号）もしくはWEB上で入賞作品を参照可。）

■**濱田教授**は、11月30日、東北文化学園大学で開催された日本音響学会騒音・振動研究会において、「重量床衝撃音と生活行為による実衝撃音との対応に関する聴感評価実験」と題して研究発表を行った。

■**人事**：本学科に永年勤務されご活躍された**渡澤正典講師**が、9月27日退官された。